

静かに消えて行く船大工

海の博物館 石原義剛



542隻目の船を造っていた岩瀨文雄棟梁（平成16年夏）

543隻を造った船大工

棟梁・岩瀨文雄は昭和五年生まれ現在七十五歳である。その造船場を大原造船所というのは生まれ故郷の山里、岩手県大東町大原から名付けたという。子供のとき遠足で登った山の彼方に見えた海に憧れた。昭和二十二年十七歳のとき父親に連れられ十二時間歩いてやってきたのが、その時見た海、宮城県唐桑半島だった。五人兄妹

ことが要求される。もちろん造船場の立地も重要な条件である。すなわち、優れた船大工には「木（材料）を選び」「道具を整え」「造船環境を整える」総合的な能力が備わっており、その結果で尊敬されているわけである。

忘れてならないのは、彼の造った船に、漁師たちが命を託くすこと。船はなによりも安全でなければならぬ。新船を進水する時、海に浮かべて左右に大きく揺すり傾けるのが最初にする儀式である。この船はこんなにも安全ですよと誇示するのである。

船大工が消える日

船大工にとって造船の注文がなければ、腕を振るう機会はない。平成十六年に造船された木造和船は、わたしの知る限り全国で十五隻に過ぎない。数少ない木造船を使う機会は、現在、①伝統的な祭りでの競漕神事、②鵜飼い、アユ漁など川漁、③川での遊覧、④わずかな地域での磯漁撈、そして⑤博物館や展示施設での伝統船の復

RPに転換する中、がんとして木造船を続けた結果だ。

これまでわたしは八十人以上の船大工に会って、その経験を聞き取り調査しつづけてきたが、八割以上の船大工が父親か親戚の跡を継いで船大工になったのに比べて、岩瀨の動機は異例である。

大半の船大工は尋常高等小学校、新制では中学校を卒業して十五歳で熟練した船大工の見習いに入った。五年間修業した後、一年間お礼奉公し、旅に出るといふか他人の飯を食うといふか、他所の造船場で修業を重ね、だいたい三十過ぎで、あれば父親の造船場を継ぐ。なければ独立して造船場を起こす。嫁をもらうのが切っ掛けになることが多い。嫁を連れて旅稼業も出来ぬからであろう。

唐桑湾宿浦の波静かな一角に斜路を持つ造船場には、岩瀨の深い経験の跡が所々に刻み込まれている。「この頃、子供がよく訪ねてくるので、船大工にとって一番大切なのは、木を選ぶことと、道具をいつもきちっと整えておくこと

だ、というんだよ」と笑う。船造りの技術のことは言わない。

船大工は独特の総合技術者

木造の船大工と家大工の技術を比べると、船大工に独特な技術が二つある。スギの板材を曲げる技術。板材の縁と縁を平行に繋ぎ合わせる「接ぐ（はぐ）」技術。この技は熟練を要する業である。

盛んな漁村を尋ねると、どこでも船大工の居場所はずぐわかる。船大工が村最高の知識人として尊敬されているからである。船大工の技術といっても、右の二つだけではない。先に岩瀨が子供たちに「木を選ぶ」といったのは、船体を造る木が最も大切なことを意味する。さらに船クギ、マキハダ、ウルシなど附属材料すべての選択も含めて。「道具を整える」のは職人にとって欠かせぬ条件である。船大工の使うノコギリとノミ（ツバノミという）は家大工とは著しく異なる。産地の限られた特別な道具を入手し、その後、大事に手入れしながら使いこなす



船大工の道具の中でも独特のノコ（右）とツバノミ（左）



船大工は良い材を選んでよく乾燥させる



板を曲げて曲線を出すのも船大工の技



船板を「接ぐ（はぐ）」のは船大工ならではの技術。一度密着させた板と板の間をノコで引き切る



先端（ミヨシという）に向かって板を曲げる

元、などに限られる。

推定であるが、昭和三十年代後半の漁船造船最盛期に、日本列島に一万から一万五千人位の船大工がいたと思われる。年間一万隻くらいの木造船が造られていたに相違ない。わたしはほぼ五十年にわたって日本財団から研究助成を受けて、現存する船大工の調査をつづけてきたが、平成十七年当初の報告書に、現存する「造船可能な船大工」は三百二十五人だと報告した。実際はそれより少ないと思

う。それも大半が六十五歳以上の高齢者。長崎や奄美で、祭りの船競漕用の木造船を専門に造る造船場に、わずかに親から子への後継者が育ち残っているに過ぎない。まさに船大工が消えようとしている。列島から伝統的な職人が消えようとしているが、船大工には生きながらえるために転換する方向が見つからない。これがきついで、桶屋、籠屋、鍛冶屋等ほとんどか工芸品に向かい、仕立て屋、靴屋等は少数だが超高級品で生き延び

る。しかし、船大工だけは転換の方策が見つからない。岩瀨棟梁が、岩手県の山から降りて船大工になった時には、彼に技術を伝える多数の先輩がいた。彼はその技術を盗めばよかった。しかし、間もなく盗むべき相手がなくなってしまう。残念ながら岩瀨にも後継者はいない。海の船大工に憧れてくる若者もいない。数千年も受け継がれてきた日本の伝統技術が間もなく消える。